

# 研修会参加報告書

山口 忠孝

市町村議員研修会

◆平成26年11月17日(月)～11月18日(火)

◆全国市町村国際文化研究所(滋賀県大津市)

## 平成26年度 第3回市町村議会議員特別セミナー

今回の研修会は、地方行財政、地域経済、自治体経営をテーマに、各分野で活躍されている4氏の先生方から講義を受けました。今後の地方行政のあり方や地方議員に求められる役割について、色々と考えさせられました。また、今回一番聴きたかったのは、武村正義氏であり、今回参加を見送ろうかと思案したのが樋渡啓祐氏の講義が予定されていたことでした。しかし、樋渡氏がどのような話を外でされるのか黙って聞いてみようと思い直し参加しました。(全国から284名が参加)

### 11月17日【1日目】

講義Ⅰ 「地域の社会経済の存続に向けた行財政システムのあり方」

日本大学経済学部 教授 沼尾 波子氏

講義Ⅱ 「この国のゆくえと地方政治のあり方」

元 内閣官房長官 武村 正義氏

### 11月18日【2日目】

講義Ⅲ 「人口減少社会における地方創生と自治体の役割」

明治大学政治経済学部 教授 加藤 久和氏

講義Ⅳ 「武雄市のまちづくりに見る自治体経営と行財政」

佐賀県武雄市長 樋渡 啓祐氏

### 講義Ⅰ

#### 1. 日本経済を取り巻く現状と展望

- 3つの生産要素—土地・資本・労働力+情報・技術
- 人口減少、高齢化→労働力の減少、消費者の減少
- 3つの経済システム—市場(交換)の拡大で政府(再分配)社会(互酬)が縮小
- 社会保障の財政—公費負担の増大…消費税負担で活路を求める
- 日本は政府が信用されていない
- 国の財政悪化で地方も財源不足が生じている
- 「地域包括ケアシステム」の構築～地域で支えあう

#### 2. オランダ・ボクステル市の事例

- 福祉分権化の流れ—乳幼児から高齢者までのケアのプラットフォーム施設立ち上げ

- 旧ウルスラ修道院をコミュニティ・プラットホームに活用
- 医療、福祉（ケア）、文化等、幅広い役割
- 行政＋民間非営利団体で運用
- 各団体には専従スタッフ（専門性を持った職員＋ボランティア）

## まとめと感想

自治体は財政難、職員減少等厳しい状況であるが、これから 10 年後のビジョンを明確化し将来を見据えて、その不足する担い手や財政を確保育成する仕組みを作らなければならない。租税負担を通じて、安心な暮らしが確保されるという信頼回復が必要であるという講師の言葉が、単純であるが行政や政治に求められているのではないかと感じた。

## 講義Ⅱ

### 1. 日本の政治指導者の歴認識の欠如

○日中国交回復（田中角栄と周恩来）で日本の賠償を放棄した中国の寛大さ。中国の地で戦争行為を行ってきた。朝鮮を 36 年間日本の植民地とし、創氏改名などで支配してきた。

○過去に目を向けない日本のリーダーたちが嫌われている。日本は戦争の総括（反省）をしていない。日本人は過去に触れたくない、あいまいにする国民性（福島原発事故の責任も問われていない）。

### 2. 戦後 70 年の日本

- 日本は経済成長を成功させた。
- 戦争のない平和な日本だった。
- 国民は個人所得 4 万ドルの暮らしを享受している。

### 3. そろそろ転換期を迎えている

○成長はもう続かない。まじめな経済学者はもう経済は伸びないと言っているが、政治家は伸ばすと言っている。無限に成長するのは不可能である。

○人口は減っていく。明治の初めは約 3000 万人、70 年前は約 8700 万人、今は約 1 億 2000 万人だがこれからどんどん減っていく。持続の可能性がない。

○世界一の巨大な赤字の国だ。1000 兆円を超える借金がある。にもかかわらず黒田日銀総裁は円の量的緩和を実施し、安倍総理と大ばくちをやっている。財政悪化と悪性インフレが同時進行するスタグレーションになる可能性がある。銀行が国債を買っていて、市場にお金が出回っていない。

○もはや大国の時代は終わった。明治からの近代化の中で軍事大国に進み敗戦を迎え、戦後は経済大国の道を歩んできた。

### 4. 何が必要か

- この経済をどうして持続するのか。地球の資源は無限ではなく限りがあり、

環境の保全も必要である。定常社会をめざさなければならない。

○物の豊かさから心の豊かさへ。お金儲けよりどのような生き方を選択するのかが重要になってくる。

○元気で個性的な地方の時代へ。これまでは、均一化した平等なローカルカラーを失くしたまちづくりをやってきた。

## 5. 個性的な地方の時代へ

○江戸時代には地方に個性があった。徳川の時代は封建制であり地方自治の時代であった。

○戦後の自治は輸入されたものだが、日本に根づいたか疑問。歳入の自治はなかった—総務省（国）が決定権を持っている。タテ意識が強い—行政は県や国を向いて仕事をしている。住民や地元の意向に沿う仕事が必要だ。自治への住民の関心が薄い—市町村に期待していない住民が多い。議会は首長を監視できているか—もっと研さんを積んで頑張ってもらいたい。

## まとめと感想

消費税増税の延期を問うため衆議院解散総選挙をやるという安倍政権を批判された。国民は税金が上がらなくて良かったと思っているし、経済界も景気が悪いので延期しても仕方がないと思っているのになぜこの時期に選挙をやるのかわからないと述べられた（必然的に誰を相手に政治をやっているのか見えてくる）。また、冒頭に政治指導者の歴史認識のなさに苦言を呈されたのは、このところの日中・日韓・日朝関係の進展のなさを憂慮されてのことだろう。

講演の中で『資本主義の終焉と歴史の終わり』水野和夫著（集英社新書）を薦められたが、私はすでに読んでいた。まさにこの本の内容にあるような時代にきていると認識を新たにされた。ではどうしたらいいのかが一番問題であり、その処方箋もわかっていないし、難しい問題である。物の考え方を変えない限り、残念ながら無理だと思う。次の世代に頼むしかないので、教育の方向—めざす方向を変えるべきだと思う。しかしそう簡単にいかないのが悲観的にならざるを得ない。

## 講義Ⅲ

### 1. 人口減少時代の到来と少子化問題

○子どもは社会の宝であるというように、子どもを公共財的な性格とみなすなら、子どもを育てるための支援として租税を投入することが肯定される。これが少子化対策の根本の考えである。

### 2. 地方消滅？極点社会の衝撃

○第一の目標として、人口を安定的に維持できる水準である人口置換水準（出生率=2.1）をめざす。第二に東京一極集中に歯止めをかける。子育て支援や地

方での雇用の創出。地方の拠点都市を中心にコンパクトシティを作っていく。

### 3. 人口減少時代の地域づくりと自治体の役割

地域活性化の限界—産業誘致・雇用の創出の限界、観光は持続可能できるのか、ハコモノの建設は財政逼迫、自然環境の保存ができる役割の引き受け先は。

### 4. 地方創生の条件

これからは、自治体間の連携や広域行政と役割分担、面的な合併から機能面の合併が重要になってくる。また、お金のバラマキの排除と効率化が求められる。

」

### まとめと感想

目先の 5 年から 10 年位までは、想像して見通すことができるが、30 年後はどのような社会になっているか想像がつかない。将来を想像するのはたやすいことではないが、これからは、きちんと次の世代に伝え渡せるものを確立することが大事ではなかろうか。それに加え、これまでと同じ発想ではなく、様々な情報を整理分析し、新しい考えを発見し作りだしていく能力が必要となってくるのではと感じた。どうしても、目先の事だけを考えてしまいがちになり対処療法的な対応になって問題の本質が見えにくくなっている気がする。

## 講義IV

冒頭、現職で最後となる記念すべき講演になるかもと発言

### 1. 雰囲気作り

- ・ふつうは舞台のそでから講師は出てくるのだが、樋渡氏は聴衆者と同じ客席から登場された。IT 企業の新製品のセールストークをみるようにステージの上を動き回り、時には客席に降りたり。服装もカッターシャツにスラックスというラフな格好。

### 2. 笑いをとる話術—時事漫談

- ・自分に反対する人は“おかしい人たち”と一括。
- ・会議は 15 分で結論を出す。失敗の責任はとらない。10 のうち 7 は企画段階で没になる。何でもパクってもものまねでやる。
- ・議会では自分の発言で“暫時休憩”ばかり。現在 2 件訴えられている。実質の市長は実績のある行政の専門家の副市長と公言
- ・公私混同一公私一体でやっていく
- ・田舎は選挙が唯一の娯楽
- ・SNS には色気があると発言
- ・FB 商品販売事業を戦略としてやっていく
- ・スマホで武雄市や自分のことを発信してもらう
- ・良い事も悪い事も話題としてマスコミやネットで取り上げてくれればいい

- ・ブランド力のある人と会い宣伝に使う

#### 4. 政策として

- ・病院、図書館、住宅が重要な施策の対象
- ・政策には物語が必要
- ・武雄の名が全国区になり、市民価値を上げる
- ・政策はチームを組んで取り組む
- ・中心部に人口を集中させ、周辺部で花まる学習塾の官民一体型の教育を押し進める
- ・これからはアートが注目されるので、金沢市の 21 世紀美術館のようなものをまねて作ってみたい

#### まとめと感想

総選挙に古川知事が転出し、後の知事選に樋渡氏が出るという噂が流れていたが、本人はその気であるような講演だったが、時にジョークを交え笑いを取り、聴衆の心を惹きつける話術は、お笑いのよしもと顔負けの感があった。女性議員や若手の議員の中には、完全に魅入られたような人がいた。かつてローマ帝国の支配者は、パンとサーカス（食べ物と娯楽・見せ物）で民衆を惹きつけて支配したように、樋渡氏の手法は、IT 技術を駆使して同じような支配を考えているように思える。物事の善悪ではなく、良くても悪くても話題（娯楽として）となり注目されれば宣伝になるという戦略で、反発されてもさらにそれを話題にするという手法には頭が上がらない。秀才として頭が切れる人間はこういうタイプで、IT の世界にどっぷりつかりこんだらそこから抜け出せない人間の典型のようだ。グローバル化・市場原理主義の申し子のように私には見えない。

上に立つ人は能力も必要だがそれだけではないと思う。他の人を思いやる心や自省する心も大切ではないだろうかと考えさせられた講演であった。今後の議員活動も市民のためということを忘れずに頑張りたいと改めて思った。